書評

『エスニック学生組織に見る「祖国」——フィリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化——』

木下昭著

不二出版、二〇〇九年、A5判三一〇頁、五八〇〇円＋税

日下 渉

本書は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）とフィリピンという二つの国民国家の狭間で揺れ動くフィリピン系アメリカ人学生の経験を通じて、グローバル化がもたらす国民国家と移民の新たな関係を検討する労作である。まずは、本書の概要を整理しておこう。

フィリピン系アメリカ人の数は、アジア系移民としては中国系移民に次ぐ。また、現在でも毎年五万人前後が移民し続けている。しかし、彼らはアメリカ主流社会に溶け込んでいるとされてきたために、彼らに関する研究は少ない。本書が取り上げるフィリピン系アメリカ人学生の多くは、一九六五年の移民法改正を背景に移民してきた高学歴の専門・技術職者を親として持つ移民二世である。もっとも、フィリピン出身の移民一世も少なくない（第二章）。

彼らの多くは、中間層以上の地位を獲得しているが、必ずしも一方的に「アメリカ人」へと同化されているわけではない。他方で、アジア系の彼らのエスニシティは、社会上昇を果たした南・東ヨーロッパ系の白人が表面的に保持する「象徴的エスニシティ」の概念でも説明できない。むしろ彼らは、「アメリカ人」として取り込まれつつも、旧植民地出身のアジア系として周縁化されている。そして、フィリピン系としてのエスニックな意識と、「祖国」への帰属意識を示す「遠隔地ナショナリズム」を抱いているのである（序章、第一章）。

著者が調査を行ったフィリピン系アメリカ人学生組織の一つは、比較的裕福な学生が多いサンフランシスコ州立大学のKaibigan Filipino（KP）である。同大学には保守的な雰囲気があり、またフィリピン系の数も少ないため、彼らは疎外感からKPに参加する。そして、その活動を通じて自らのエスニシティに対する積極的評価を獲得する。KPには強い連帯感がある一方で、エスニシティから距離を置くフィリピン系学生に対して排他的傾向もある。もう一つは、カリフォルニア大学サンディエゴ校のPACE（Pilipino American Collegiate Endeavor）である。そこでは大学の多文化化が進んでおり、学生はあまり疎外感を感じていない。ここでは、エスニック・スタディーズ学部が彼らの紐帯の基点になっている。彼らがPACEの活動に求めるのは、主に個人としての達成感である。また、比較的貧しい出身が

多い彼らは、エスニック・コミュニティとも密接な関係を持っていて、フィリピン系退役軍人への支援などを行っている。このように、大学の多文化化は、移民の疎外感を軽減することで、分離的・自文化中心主義的ではないエスニシティの構築を促進している（第三章）。

フィリピン人学生組織の特徴は、祖国と結びついたエスニシティに向き合っていることである。この特徴は、エスニシティとアメリカ主流社会との区分が希薄化している日系学生組織との比較分析から明らかである（第四章）。

もっとも、アメリカ主流社会によって劣位に位置付けられたフィリピン・エスニシティを肯定的に捉え直すことは容易ではない。その軋轢は、同世代の移民一世と二世の間における「生地間対立」に表れている。アメリカ出身の二世は、新たに移民してきた同世代の一世が持つフィリピンの属性（英語の訛りなど）を蔑視しがちである。しかし、大学におけるエスニック・スタディーズでのフィリピン系教員との出会いや、学生組織での活動は、心の脱植民地化と、祖国に対する肯定的評価をもたらす。そして、一世が持つフィリピンとのつながりも肯定的に捉え直されるようになるのである。この生地間対立をめぐる「懺悔」と「克服」は、学生組織のイベントにおける主要なテーマになっている（第五章）。

このように彼らが自らのエスニシティを積極的に評価していくきっかけとして、民族舞踊が重要な役割を果たしている。民族舞踊は、フィリピンにおいて、脱植民地化と国民統合のために、フィリピン文化の象徴として創られたものである。この民族舞踊は、移民の移住先でも公演され、高い評価を受けている（第六章）。

フィリピン系アメリカ人は、この民族舞踊に、多様な意味づけをしている。コミュニティ民族舞踊団のパサカットにとって、民族舞踊は、アメリカ国内における周縁化と祖国の植民地化という「二重のコロニアリズム」に対抗して、アメリカにおける承認の要求と、「フィリピン人」としての祖国との紐帯という遠隔地ナショナリズムを表出するものである。他方で、KPが行う民族舞踊では、「フィリピン人」としての意識の表出はみられない。この違いは、パサカットを構成するコミュニティの人びとが深刻な差別に直面してきたのに対して、比較的裕福な学生はそのような体験をしておらず、またその親もフィリピン文化の継承を重視しないからである（第七章）。

このように、少なからぬフィリピン系アメリカ人が祖国との紐帯を表出しているのに対応して、フィリピン政府は、移民を対象に「国境を越えた国民化」政策を展開している。例えば、祖国に関する学習・旅行機会の提供、移民に対する特権の供与、在外投票法、二重国籍法などがそうである。これらの政策は、国境という枠組み（領土）を取り除いた国民国家建設の試みである。しかし、フィリピン政府が、移民の遠

隔地ナショナリズムを高揚させているわけではない。むしろ、移民たちの祖国への遠隔地ナショナリズムの実践に対して、政府が関与しようとしているのが実態である（第八章）。

さらに、フィリピンへの遠隔地ナショナリズムを発露させる学生の中には、積極的にフィリピン政府に対抗する運動に参加する者もいる。彼らは、祖国との関係が薄く、また裕福な階層に属する。彼らを遠隔地ナショナリズムに駆り立てるのは、引き続く移民の流入、学生組織の役割、地域のフィリピン人が展開してきた祖国支援活動の歴史である。彼らの目的は、フィリピン系アメリカ人に、祖国の状況に対する批判的意識を高めるように働きかけることである。いわば、アメリカ人であることを前提とした上で、良きフィリピンを構想・希求するのである（第九章）。

このように、フィリピンとアメリカという二つの国民化のせめぎあいの只中で、フィリピン系アメリカ人学生は揺れ動いてきた。彼らは、アメリカ人として同化される一方で、フィリピン系という意識を失うことはなかった。これは、国民国家が、他国へのナショナリズムを保持する自国民を抱え込む状態を示している。これまで、遠隔地ナショナリズムが成立する条件として、国境を越えた情報や人の移動が指摘されてきた。しかし、彼らの祖国への意識を育んでいるのは、個々の国境を越えた移動ではなく、むしろアメリカにおける周縁化、移民の継続的な流入、国内外の政治情勢、フィリピン系コミュニティとの接点、そして学生組織における経験である。フィリピン系アメリカ人学生組織は、アメリカにおける承認を求めるだけでなく、フィリピンとのつながりを促進する性格も持つのである（終章）。

以上、整理してきたように、本書は、非常に興味深い事例の検討を通じて、グローバル化時代における移民と国民国家の再検討という課題に対して重要な論点を提示している。フィリピン政治を専攻しているとはいえ、移民研究に取り組み始めたばかりの評者にとって、事例そのものを論じることは困難であるため、ここでは本書に内在している理論的意義と課題について論点の提示を試みたい。

本書の目的は、アメリカとフィリピンの間で揺れ動くアメリカ系フィリピン人学生の意識を多角的に分析することであり、その試みは概ね成功している。各々の事例は大変魅力的で、評者は彼らの置かれた世界へと引き込まれていった。とりわけ、劣位に位置付けられたエスニシティを内面化させた彼らが、学生組織での活動を通じて心の脱植民地化を経ていくプロセスの記述は、強い説得力を持つ。

やや残念に思われるのは、彼らを「アメリカ化」また「フィリピン化」する条件が各章で列挙され、統合的に提示されていないことである。そこで、評者が本書から理解したなりに、これらの条件をまとめ直してみたい。まず、社会階層の上昇は彼らをアメリカ化させる傾向がある。だが、継続的な

移民の流入、エスニック・コミュニティとの関係、アメリカ主流社会での周縁化、フィリピンの政情不安といった要因が、彼らのフィリピン化を促進している。また、学生組織の活動は、フィリピン化の反映であると同時に、彼らをフィリピン化させる要因でもある。これらの因果関係は、より詳細な検討が必要であろうが、今後の議論の土台として十分な意義がある。

それから、日系学生組織、PACE、KP、パサカットの比較分析を通じて、移民が祖国に対して抱く態度の差異を、彼らの置かれた状況とアメリカ主流社会との関係から説明している。すなわち、より多文化化が進んだ状況では、より希薄で異文化に対しても包括的なエスニシティが構築される。逆に、主流社会から周縁化されている程度が強いほど、より強いエスニシティないしナショナリズムを抱くようになるというのである。

こうした多文化化の進展が自文化中心的ではないエスニシティを生みだすという知見は、多文化主義を擁護する有効な論拠にもなろう。何故ならば、近年、多文化主義に対しては、多文化主義がエスニック集団の間に深刻な対立をもたらし、市民的連帯と政治的安定を侵食するという批判が提示されてきたからである。

他にも、本書は、エスニシティとナショナリズムに関して新たな理論的視座を切り開く可能性を十分に内包している。ただ惜しむべき点は、本書は従来の概念では捉えきれない現象を豊富な資料で示している一方で、代替的概念を提示していないことである。

まず、著者は、状況に応じて脱着可能な象徴的エスニシティという概念では、フィリピン系アメリカ人のエスニシティを捉えきれないことを説得的に指摘している。それでは、彼らのエスニシティを捉えられる概念を仮説的にも提示することはできないだろうか。

次に、本書は、国境を越えた人の移動と通信技術の発展が遠隔地ナショナリズムの成立条件であるという従来の議論に対して、個々人による直接的な祖国への移動がなくとも、それが成立すると主張している。これは、遠隔地ナショナリズムの成立条件に根本的な修正を求めるものなのだろうか。評者としては、本書が遠隔地ナショナリズムの成立条件として新たに指摘するアメリカにおける周縁化、移民の継続的な流入、フィリピン系コミュニティとの接点は、やはり「人の移動」によって、また祖国の政治情勢については「通信技術の発達」によって説明できるようにも思える。それから、興味深いのは、本書独特の着眼点である学生組織で涵養された遠隔地ナショナリズムが、従来指摘されてきたものとは異なる独特の特徴を持つのか、という点である。アンダーソンが描く遠隔地ナショナリズムは、祖国の政治不安の要因となりうるものであるのに対して、本書の描くそれは民族舞踊による

祖国との紐帯の表出や、同胞のフィリピン系アメリカ人の意識化を目的としている。この異なる性質は、いかに説明できるのだろうか。

もっとも、このような疑問は、本書の理論的射程の広さを示すものであって、その価値を損なうものではない。本書は、フィリピン系アメリカ人学生組織に関する貴重な事例を提示し、また多様な理論的可能性を有する重要な研究書である。今日の多文化的状況に取り組む者にとって必読の書であり、今後の議論の発展が望まれよう。

（くさか　わたる・京都大学）

書評に応えて

木下 昭

まず、拙書を書評に取り上げ、書評者の選定や依頼の労をとってくださったソシオロジ編集委員の方々、そして書評をしてくださった日下渉さんに深くお礼申しあげる。

拙著では、フィリピン系アメリカ人学生組織を核に、アメリカ合衆国（以下、アメリカと略す）における移民を事例に国民国家そしてナショナリズムの現状を検討している。日下さんのご指摘は、私の研究がまだ道半ばであることを明示している。本稿ではこれを踏まえて、可能な範囲で拙著の補足を行いたい。まず、拙書で得られた知見の全体像を整理したのち、象徴的エスニシティおよび遠隔地ナショナリズムという二つの概念と拙著の論点との関連について述べたい。

一　ナショナリズムと移民、コロニアリズム

拙著の議論の主軸には、現代のナショナリズムをいかに捉えるのかという問題意識がある。この巨大すぎるテーマと向き合うにあたり、現代社会の特徴とされるグローバル化の核を担う移民の存在に注目した。その事例として、フィリピン系アメリカ人を取り上げたが、彼らのナショナリズムを考察することは、単にアメリカとフィリピンという二つの国民国

家と彼らとの関係、両国のナショナリズムの彼らへの影響を問うだけではない。

この文脈において、近年ことに重要性が指摘されるのは、国民国家形成と帝国との関係である。というのも、ナショナリズムにとって自他関係は大きな意味を持つが、帝国支配における宗主国と植民地の接触は相互に自己を明確化させたからである。アメリカの国民形成においても、他者としてその支配下にあった植民地の重要性が指摘されるようになっており、その一つであったフィリピンは、無視しえない存在とされる。

一方、フィリピン・ナショナリズムは、植民地の国民国家形成にしばしばみられるように、帝国下にあったことがその基盤と成った。つまり、国境線に代表される国の枠組みそのものが植民地支配と不可分である。そして他者としての宗主国への意識がナショナリズムの高揚において大きな意味を持っていた。スペイン、最終的にアメリカから独立したフィリピンにおいて、自己でありかつ他者である二つの宗主国の存在は無視しえない。拙著で触れた英語の問題や民族舞踊は、この旧植民地の自己形成の複雑さを示している。

これまでみてきた両国の歴史的な関係を踏まえると、フィリピン系アメリカ人は、帝国的植民地支配を軸に密接に関連する二つの国民国家形成を背景に移動してきた存在なのである。であるがゆえに彼らは、他の移民たちよりも祖国の存在が相対的に重要な意味を持ちうる。アメリカ人であることは、他者の存在、すなわち国内におけるネイティヴ・アメリカンやアフリカ系アメリカ人などのマイノリティとともに、歴史的にはフィリピン人に負う部分があるからである。したがって、ことにアメリカ人であることが自明な二世にとって、フィリピンとどう向き合うかが課題となる。拙著で取り上げた学生たちの活動はその一例といえる。彼らはこうした全体構造の中で、アメリカで付与されてきたフィリピンへの否定性を克服する必要に迫られるのである。これはアメリカ国内における、いわゆる人種差別と相まって、「二重のコロニアリズム」として彼らにとって大きな課題となってきた。彼らは、自らが担う「フィリピン」を消去するのではなく、積極的に提示することで、その克服を目指してきた。すなわち、彼らの活動は一九六〇年代後半以降のエスニック・リバイバル、あるいは多文化主義の延長線上にある。ただ他のエスニック・グループと異なるのは、彼らの誇るべきルーツがアメリカによる植民地化の影響を受けていることである。ここに自他関係の入り組んだ陥穽に彼らが位置していることが示される。フィリピン生まれに対する「いじめ」への対応、そしてフィリピン民族舞踊への傾倒は、事象としては異なるが、こうしたコロニアリズム超克の取り組みなのである。

拙著の議論の全体像は、右記のように捉えることができよう。ただ、こうした図式は有効ではあるが、これで説明でき

る部分にはおのずと限界がある。例えば、取り上げた二つの学生組織間、あるいは学生組織とコミュニティ舞踊団との間には無視しえない相違があった。これは、現代のナショナリズム研究やエスニシティ研究が一般的に直面する困難、すなわち、特定のカテゴリーでくくられる集団内の多様化である。国民国家としての在り方の変化（法的な差別の否定、アファーマティヴ・アクションのような政策、多文化主義の相対的浸透など）および、グローバル化によって、アメリカにもこうした変化が進行している。

そこで拙著では、エスニック学生組織という極めてミクロな研究対象を起点とし、現代のエスニシティ、およびナショナリズムが生み出す現象の一面を切り取ることを目指したのである。学生組織に参加するアメリカ育ちの子供たちは、それぞれの人生経験、生活世界の中で、アメリカが構築してきた国民形成の自他区分と向き合う（あるいは向き合わない）。これがいかに彼らに影響してきたのかを、学生たちの活動から分析することに主眼が置かれているのである。

二　マイノリティの社会的上昇とエスニシティ

現代移民の多様化には、かつて差別されてきた集団の社会的上昇が含まれる。拙著で取り上げたフィリピン系学生組織のメンバーに多い、中間層に位置する人々がこれにあたる。こうした状況は、ホワイト・エスニックと呼ばれた、かつて差別された白人（東・南ヨーロッパ出身者）たちと類似している。彼らのエスニシティが、実生活から乖離しつつもシンボルとして適宜表示される姿は、象徴的エスニシティと称される。たしかに、フィリピン系学生たちの家族には、居住地や勤務先、そして子弟の教育方針などがエスニシティに規定されていないケースが散見される。

しかし彼らの場合、民族舞踊への固執などをみる限り、象徴的とはいえないというのが拙著の主張であった。象徴的エスニシティという概念の適用が、対ホワイト・エスニックと同様の差別の消滅を含意するとすれば、ことに先述の歴史的過去を負うフィリピン系アメリカ人への応用は慎重にならざるをえない。しかし一方で、人種やエスニシティによる差別という単純な図式で説明しうる領域が縮小してきているのも事実である。白人でなくとも社会的上昇の可能性が拡大しているのは、拙著が扱ったフィリピン系アメリカ人だけではなく、とりわけアジア系に広くみられる現象になりつつある。

このフィリピン系アメリカ人たちのエスニシティ表象をどのように規定するのかは、今後の課題としたい。というのも、彼らのエスニシティの将来像が見通せないからである。一つの可能性を示唆しているのが、最近学生たちにみられる、「伝統的」民族舞踊に加工を施すエスニシティ表象の浸透である。彼らは、民族舞踊にヒップホップのようなアメリカ一般の文化を導入している。この現象が象徴的エスニシティへさらに

近づいた形態なのか、それとも新たなエスニシティ表象の形なのか。この分析が進めば、拙著で取り上げた現象をより明確に位置付けることも可能になろう。付言すれば、日系アメリカ人学生組織では、かつて日系のエスニシティ表象とされたものが一般化する傾向がみられる。アジア系の中で最も成功しているとされる彼らの姿が、今後フィリピン系なども至る道なのか否かも、調査検証したい。

三　遠隔地ナショナリズムの新規性と多様性

前節でも触れたように拙著では、白人でないフィリピン系の人々が一部であるにしろ、アメリカで社会的上昇を果たしていることに着目している。このことは、彼らと祖国との関係にも影響しうる。この関係を扱う概念としては、「トランスナショナリズム」や「ディアスポラ」などがあるが、なかでもナショナリズムに注目するのが、「遠隔地ナショナリズム」である。この現象の解析は、国境内のナショナリズムの統括が当該国民国家の基幹である以上、現代のナショナリズムのあり方を検討する手掛かりとなる。

国境を越える移民たちの他の活動と同様に、遠隔地ナショナリズムについては、さまざまな議論がなされているが、その論点の一つが新規性の評価である。一方では、この現象は現代の通信・移動手段の進歩、これらを含むグローバル化の産物とされることが多い。しかし他方で、これに異議を唱える意見も根強い。というのも類似した現象が、かつての移民たちにもみられることは、しばしば指摘されているからである。確かに、移動・通信手段が今日のように発達していなかった太平洋戦争開戦前においても、たとえば「日系アメリカ人」と日本との結びつきは、遠隔地ナショナリズムと解釈しうる余地を大いに示している。この問題をめぐる論争があまり深まらないのは、そもそも遠隔地ナショナリズムの定義に根本的なところで合意がないためである。これはさらにいえば、ナショナリズムとはなにか、という難題と接続するがゆえに克服するのは容易でない。筆者の場合は、民族舞踊のような文化表現にもナショナリズムを見出しており、ナショナリズムを幅広い現象として扱っている。このような立場をとると、今日の遠隔地ナショナリズムは、拙著で取り上げた事例を含めて、かつての現象の変形と解釈しうるように思う。しかしこれは国境を越える紐帯をいかに捉えるべきかという根本問題に関わっており、稿を改めて論じたい。

ここでは拙著と関連するもう一つの問題を中心に、遠隔地ナショナリズムに関して議論の整理をおこなっておきたい。このナショナリズムを移民の側から論じる場合、いうまでもなく彼らと祖国および居住国との関係が重要な意味を持つ。祖国との関係では、その国民化政策の影響を直接得ており、祖国とのネットワークを保持していることが多い一世と、こうした要素が希薄な二世以降との間には、多くの場合大きな

相違が存在する。一方居住国との関係では、移民たちの社会的上昇（及び彼らの現状認識）に着目すべきである。というのも、遠隔地ナショナリズムをはじめとする移民と祖国との紐帯を扱う議論において、居住国での疎外や排除がその主要発生要因としてしばしば言及されるからである。

これらの条件の相違が遠隔地ナショナリズムにどのような影響を与えうるかを精査する必要がある。現在のところ、多くの論考が居住国で疎外されている移民一世による国境を越えた活動を取り上げている。拙著の事例は二世以降の、相対的に恵まれている学生であり、この対極にあたる。この二つのケースを対比させると、前者の議論の核は、居住国へのナショナリズムの否定ないし遮断が、すでに回路がある祖国に対するナショナリズムの高揚を促進する、というところにある。一方、後者は居住国へのナショナリズムと祖国に対するナショナリズムの共存がポイントとなっている。拙著の事例で、遠隔地ナショナリズムを表出したとしても、祖国への間接的な活動に終始することが多いこと、そして個々の祖国への訪問や情報のやり取りではなく、ある種の思想が彼らの活動を支えていることは、後者の性格を反映していることによると考えられる。ただその活動の帰結や影響については、関連国の環境に左右されるため、この分類と単純に結びつけるべきではない。

遠隔地ナショナリズムの議論も、アメリカ社会における移民の位置に規定されるがゆえに、先述の象徴的エスニシティの議論と同様の問題につきあたる。つまり、アジア系のようなマイノリティの社会的上昇が可能となった現実が、これまで構築されてきた移民関連の研究成果とどのように接続されるのか、という問題とかかわってくるのである。これは今後のアメリカ社会を考察するにあたって不可欠な視点であり、長期的には他国におけるマイノリティ研究にも示唆を与えると考えられる。この把握とそれを踏まえた理論構築がともに筆者の課題である。

（きのした　あきら・立命館大学文学部非常勤講師）